

元世界銀行副総裁

にしみず 西水 美恵子さん

人間発見



子どものころはピアニストになるのが夢だった

大阪府豊中市で生まれ、北海道の美唄で育つ。三井鉱山(現在の日本コークス工業)に勤める父は鉱山閉鎖の前に多忙で連日遅かった。母は専業主婦。女性も手に職をつけるべきだという考えで、早くから自立を促された。

ばいばい、自分の頭で考えなさい。自分でも情けなくなり、また郵便局まで戻りました。幼いころからピアノを習わされ

たのです。ピアノを続けて芸大へという選択肢もあるがむずかしそう。では一生懸命勉強して大学へ進んでその先は……お嫁さんし

自立促す厳格な家庭に育つ、夢はピアニスト

留学経験から米大に進学、経済学のとりに

勘当にめげず研究続け博士号、世銀から誘い

小学校に上がる前、初めてのお使いに出かけたことを今でも覚えていいます。十円玉をひとつ渡され、自宅から2分離れた郵便局で切手を買ってくるよう母から言い付けられました。ようやく郵便局に着き、背丈より高いカウンターを前につま先だけ切手を買おうとしたところ「5円ですよ」と言われた。はて困った、十円玉しか持っていない。そのまま自宅に引き返したところ、母から怒られて家に入れてもらえませんでした。「どうすれ

ました。毎週日曜、札幌まで妹と2人でおけいこに通いました。蒸気機関車の引く張る列車で往復何時間もかけて。ピアニストになるのが夢でしたが、才能がないと気づき始めます。雪がしんと降りるある日のこと、将来を考え図を描き始めました。今でいうディシジョンツリー、進路を枝分けしながら考えていっ

かないのか。そう考えると涙がぼろぼろこぼれてきました。父親の転勤で、中学3年で東京へ。都立西高校に進学する。東京都が姉妹都市に送る高校生親善大使に選ばれ、米ニューヨークを訪問する。化粧品のレプロンの社長宅にホームステイをしました。驚いたのは、専業主婦である社長の奥さん

②

も自分の意見をはっきり主張して、夫婦対等の関係にあったことです。1カ月の滞在を終えて日本に戻る途中、ぼんやりとはありませんが、日本を脱出することを考え始めました。大学進学は能力次第で男女平等なのに、当時は女性の就職先が限られていた。閉塞(へいそく)感を抱いていたのです。3年生の夏に、今度はロータリークラブの奨学制度で米フィラデルフィア郊外の高校に留学しました。留学先では英語の成績はあまりよくありませんでしたが、その

て政策に結びつける。これが新鮮でとりこになります。ジョンズ・ホプキンス大学大学院に奨学金付きで合格したが、「日本人でなくなるような気がして」いったん帰国。IBM創立者が設立した財団から奨学金を得て「公害と経済学」の研究を始める。父の紹介で千代田化工建設の特許部門に1年間籍を置かせてもらいながら、論文を書きました。1年後、ボルティモアに荷物を取りに行くという口実で日本をたちました。途中、カナダのバンクーバーで乗り換えのため1泊。山の上のスキー場にロープウェイでのぼり、眼下に開ける太平洋を見ていたら「何を悩んでいるのだろう。私のやりたいことは経済学だ」という答えが、すうっと見えてきました。帰りの航空券を親に送り手紙を添えました。「米国で大学院に進みます」。怒った父から勘当を言い渡されました。アルバイトをしながら必死に勉強し4年で博士号を取りました。プリンストン大学助教授の職を得て5年目、世界銀行の副総裁から電話が入り「うちで1年研究しないか」と。ワシントンで働く夫との別居が解消できるなど心動かされましたが、それが人生を変える電話となろうとは想像もしませんでした。(聞き手は編集委員 野村浩子)

鉄の女と呼ばれて